

2025.01.28.

T.Kobayashi

2025年初場所を征するのは誰か
大相撲初場所観戦感想の記

●まずはじっくり三日間

横綱照ノ富士は、初日に若隆景にいいように相撲をとられて、なすところなく四つん這いになった。この取組を見る限り、足が運べていないことが明白だった。二日目、三日目の相撲で勝ちはずだが、立ち合いで捕まえたり、引っ張り込んだり抱え込んだりができなければ、勝ちにはつながらないように感じた。大関では豊昇龍の、低い・鋭い・速い相撲が光っていた。腰の位置がこれまでよりも低く、立ち合いの踏み込みがあり、投げに拘ることなく休みなく前に進む取り口に、安定感と力強さが感じられた。琴櫻は、慌てふためいて相撲を取っている感じで、それを相手に見透かされているように見えた。大の里は、初日に腰高のまま前傾・前進をして翔猿に土俵際で突き落とされてしまった。二日目以降白星が続いてはいるが、膝の曲りが甘く、重心が高いまま突っ走っており、まだ安心感がない。関脇では大栄翔が、小結では阿炎が伸び伸びと相撲を取っている感じがした。前頭上位では、王鵬が突き押しを武器にするようになったことが目立ち、力強さと鋭さが出て来たのと、翔猿が良い動きをしているのが目立った。また豪ノ山が自分なりの相撲のスタイルで、元気よく気持ちの良い相撲を取っているので期待できそうな気がする。前頭中位以下の上位陣とあたらぬ所ではあるが、玉鷲・尊富士・伯桜鵬の相撲が光っていた。

●そして六日目

四日目に翔猿に敗れて五日目から休場になった横綱照ノ富士が六日目に引退を発表。初日から四日目までの相撲を見れば一目瞭然で、(私見としては)休場は想定範囲の出来事で驚きはしなかった。さてそんな六日目の土俵は……。金峰山が輝を破って6戦全勝。大きく脚を開いて重心を下げ、やや前傾しすぎな感じで繰り出す突き押し相撲で、前に落ちにくい。千代翔馬も千代翔馬らしい相撲で白星を積み重ねており無気味。尊富士の巧さと速さは相変わらずで、相撲巧者の美ノ海を寄り切り5勝1敗。見ていて安心感がある四つ相撲で、美しさも感じられる。ベテラン同士の取組、玉鷲・宝富士戦は宝富士が玉鷲の伸びてくる腕を手繰ったことで展開が変り、宝富士が勝ち、玉鷲の全勝は止まってしまった。今場所好調な二人の取組、翔猿・王鵬戦は見応えがあった。双方とも自分の持ち味を発揮したが、王鵬に凱歌が上がった。今場所の王鵬は、腰の構えが安定しており、前後左右の動きもスムーズで力強い。ことによると、一皮むけたのかもしれない。豊昇龍は難敵である豪ノ山を手際よく裁いて1敗を堅持した。その次の琴櫻・熱海富士戦は稀に見る珍事(不手際)となった。土俵際で両力士がもつれて、土俵外に足が出る前に、朝日山審判が「勝負あった」の合図(挙手)をしてしまった。他の審判が「物言い」をつけたから発覚したが、もし物言いがつかなかったら大変な騒動になっていたかもしれない。審判の「勇み足」は珍しい出来事。取り直しの結果、二本差したまま棒立ちの琴櫻を、熱海富士が極め出して征した。この間の二番の取組を見ると、腰が高いまま棒立ちで相撲をとり、自ら攻めず、土俵際で小細工して勝とうとしている琴櫻の今場所の取り口が明らかになった。何が原因かわからないが、横綱を狙う人の相撲ではない。

●さて中日になったら

尊富士、金峰山が星を伸ばしたが千代翔馬は宝富士の土俵際の妙技に敗れて後退。

豊昇龍は、ここまでの相撲とは打って変わってまさかの正代に敗退。昨日までに比べて腰の位置が高

成績	三役以上	平幕
8戦全勝		金峰山
7勝1敗		千代翔馬、尊富士
6勝2敗	豊昇龍、大栄翔	王鵬、玉鷲

く、正代のペースで相撲をとってしまい、墓穴を掘った。

その結果、三役以上には全勝も1敗もない状況になり、平幕の三力士の後を大関が追いかけるという無様な結果となっ

てしまった。これ以上悪い事態にならないことを願うばかり。

●九日目

と思ったら……。豊昇龍の低い・鋭い・速い相撲は、昨日正代に敗れたことをきっかけに消え失せて、平戸海の果敢な攻めに屈して連敗。琴櫻に至っては勝ち越しも危うい状態になってしまった。

成績	三役以上	平幕
9戦全勝		金峰山
8勝1敗		千代翔馬
7勝2敗		王鵬、尊富士

一度優勝したぐらいで「綱取りだ」「横綱だ」と騒ぎ立てた奴らと、それに乗せられてしまった当人達。

きちんとデータを読めばわかることだが、琴櫻は14勝1敗で優勝した前の場所は8勝7敗でその前の場所は

10勝。豊昇龍は13勝2敗で準優勝の前の場所は8勝

7敗でその前の場所は9勝しかあげてはいない。つまり両大関ともに、まだ大関の地位で立派な成績が保てる状態にはなっていない。この先どういう展開になるのかわからないが、一度の優勝や好成績だけで「横綱昇進」を騒ぎ立てる制度(?)や風潮に問題があるような気もする。

さてさて、平幕の四力士が縦に並んでトップ集団を形成して、その後に三役力士がポツンポツンというような凶式になってしまったが、この先どういう展開になるのだろうか。平幕の四力士はそれぞれの持ち味で伸び伸びと相撲を取っている。この中から直接対決を征した者が残るのか、それとも後続の役力士が辛うじて生き残り11勝4敗か12勝3敗の優勝になるのか。

●そして十日目、中盤終了

尊富士は一山本の突きを交わして突き落とし2敗を守った。続く王鵬は玉鷲の空いた脇を抱えて素早く土俵外へ運び、これまた2敗を堅持。千代翔馬は3敗の霧島に引き落されて完敗。

金峰山は阿炎の立ち合いの両手突きで起こされた後突き落とされて、全勝が止まってしまった。

成績	三役以上	平幕
9勝1敗		金峰山
8勝2敗		王鵬・千代翔馬・尊富士
7勝3敗	豊昇龍・大の里	霧島・

難敵を退けて3敗を維持した豊昇龍・大の里が生き残って再浮上してきたが、まだ上に平幕の4力士がいるので、もうこれ以上は負けられない。

●終盤に入り十一日目

下位で好成績の力士が上位力士と対戦し、好成績力士同士の対決も組まれる終盤に入ると、少しずつ振り落とされる力士が出てきて、千秋楽に向かう。

成績	三役以上	平幕
10勝1敗		金峰山
9勝2敗		王鵬
8勝3敗	豊昇龍	霧島・千代翔馬・尊富士

尊富士は関脇大栄翔の猛攻に敗れて3敗に後退した。金峰山は大関大の里を突き倒し、首位を守るとともに大関を賜杯争いから蹴落とした。豊昇龍は千代翔馬を力強い相撲で破り、生き残った。

中盤までの相撲を振り返って見ると、金峰山の活躍ぶりもさることながら、4日目から8連勝中の霧島と、安定した腰の構えで速さと鋭さが目立つ王鵬の相撲に注目すべきような気もする。

●十二日目

霧島が王鵬を後向きにして転がして(送り投げ)、3敗で並んだ。

成績	三役以上	平幕
10勝2敗		金峰山
9勝3敗	豊昇龍	霧島・王鵬・尊富士

豊昇龍は立ち合いで伸びてくる金峰山の腕を手繰って横向きにして叩き込んで、2敗に引きずり下ろした。

尊富士は、立ち合い後の攻防の中で鋭い突き

落として大関琴櫻を転がして3敗を守ったが、千代翔馬は大の里に完敗。

その結果、2敗一人(金峰山)を追いかける4力士という形になった。「互いの星のつぶし合いに勝ち残った力士が12勝3敗で優勝」という筋書きが浮かんできた。

この日の相撲内容から見ると、霧島・豊昇龍・尊富士の順位を感じたが、どうなるだろうか。

●十三日目、残りは三日

ここまで来ると、負け越しが決まった力士の覇気のない相撲があったり、負け越しが決まったが傷を大きくしないように頑張ろうともがく力士がいたり、悲喜こもごもの景観になってきた。

40才の玉鷲が24才の阿武尅を押し出して勝ち越しが決定。この一番で土俵が明るくなった感がある。

王鵬・宇良戦は熱戦を期待した人が多かったようだが、執拗に頭を低くして機をうかがう宇良を、王鵬がいなして崩して叩き込んだ。王鵬は10勝3敗。この日、弟の夢道鵬の幕下優勝が決まった。

霧島は落ち着いた相撲で高安を突き落とし。物言いがつく際どい土俵際ではあったが、霧島が好調であることを示すような身のこなしで、4日目から10連勝。

尊富士は阿炎の蹴たぐりの奇襲をものともせず、低い姿勢から押し出して、10勝3敗。

成績	三役以上	平幕
11勝2敗		金峰山
10勝3敗	豊昇龍	霧島・王鵬・尊富士

豊昇龍は立ち合い後の攻防の中で、咄嗟に出た首投げで大の里を下して3敗を堅持。首投げは守勢に回ってしまった時の起死回生策なのであまり褒められたものではない。機敏な動きが

目立ちはあるが、後半戦に入ってからやや粗雑さを感じる投げ技が出てきた。

結びの一番、金峰山は一方的な相撲で大関琴櫻を押し出して11勝で単独トップを守った。この取組を観察すると、琴櫻の膝が柔軟に伸縮していなく、前進後退が円滑ではないのがよくわかる。元々腰が下りないタイプの力士だが、腰か膝にトラブルがあることがよくわかる。

14日目の直接対決、豊昇龍・尊富士戦と霧島・金峰山戦を征した者が賜杯に近づくのかもしれない。

●十四日目

王鵬は隆の勝に土俵際まで攻め込まれたが、突き落として勝ち3敗に留まった。

続く金峰山・霧島戦は見応えがあった。霧島は、金峰山に突っ張らせず四つ身に食止めてうまく運び

成績	三役以上	平幕
12勝2敗		金峰山
11勝3敗	豊昇龍	王鵬

頭まで付けたのだが、外掛けで揺すぶったり余計なことをしたすきに、力任せに搦われてしまった。金峰山が四つ身の相撲でも力を出せることが証明された。

結びの一番、豊昇龍は尊富士を、素早く力強く吊り気味に寄り

切り圧勝。かくして、2敗1人、3敗2人に絞られて、千秋楽を向かえる事になった。

千秋楽の割りが発表されたが、金峰山は王鵬と、豊昇龍は琴櫻と戦うことになった。豊昇龍が負けることはまずはないだろう。金峰山が勝てば優勝だが、金峰山が敗れると三人で優勝決定戦になる可能性が大きい。

殊勲賞・敢闘賞は、表に載ったどの力士になってもおかしくはないが、技能賞と言うべき相撲内容の力士がいただろうか、いささか食い足りなさを感じる場所だ。

●いよいよ千秋楽

平幕同士の相星対決は、結びの一番を思わせるような歓声の中で始まった。王鵬が勝ったことで優勝決定戦を行なうことが決定。そして、結びの一番で豊昇龍が琴櫻をあっさり退けて、決定戦は巴戦になることが決まった。

優勝決定戦は、気迫に勝る豊昇龍が一巡目で二連勝して、すんなりと決まった。混戦を征したと見れば価値ある優勝ではあるが、横綱昇進がかかっている大関のここ数場所の成績として見ると、やや不満足と見る人もいてもおかしくはない。「ロンドン公演を控えて看板作りを急いだのでは・・・？」と指摘した新聞もあり、マスコミがいつまでも味方に付くとは限らないので、実力で示していくことが必要。

2024-大	2024-夏	2024-名	2024-秋	2024-九	2025-初	六場所合計
11勝4敗	10勝5敗	9勝4敗 2休	8勝7敗	13勝2敗	12勝3敗	63勝25敗 2休
				準優勝	優勝	(勝率 0.700)

●終って一言

相撲には番付があり、強さを軸とした地位・序列がある。そして、本場所ではその序列を越えて勝負が組まれて、結果により次の序列への組み替えが行なわれる。ここに相撲の面白さがあるのだが、強さを軸とした地位・序列が明瞭であるから面白いのであって、横綱が休場や欠場をしていたり、大関がその穴を埋め切れなかったり、番付上位の力士も下位の力士も横一線に並んでいたりの状況では面白さは半減する。

強い上位力士を本場所の一番で破った下位の力士が、評価を得て地位・序列を上げて行くところに見どころがあり、上位の力士がコロコロ負ける状態では勝った力士の価値も上がらない。

大相撲が持つ大きな問題点を提示している場所が続いているように感じるこの頃である。

以上